



【 実践報告 】

## 人間福祉学会 活動報告

広島文教大学 人間福祉学会 事務局

### I はじめに

令和4年2月23日（水・祝）に、広島文教大学人間福祉学会を開催いたしました。今年度はコロナウイルス感染拡大予防のためオンラインでの開催としました。2000年4月に開設された広島文教女子大学人間科学部人間福祉学科は、2022年4月で22年目を迎えます。人間福祉学科では、「人を支え、社会を支えることのできる人材の育成」を目標に取り組んできました。この目標のもと、どのような教育活動が行われてきたのか「人間福祉学科の歩みを振り返る」をテーマに、人間福祉学科に創設時より関わってこられた先生方にお話を伺いました。

この22年の間に、福祉制度もさまざまな変化を遂げています。しかし、本学科の根本に流れる「援助観」は、いつの時代も変わることはありません。今回は、この「援助観」を培うための取組や、エピソードについて、学科開設から今日までを振り返り、あるべき援助観を確認する機会となりました。

### II 内容概要

コーディネーター

木村 敦子

シンポジスト（五十音順）

蛭江 紀雄 会員（2011年度まで在職）

菅井 直也 会員

李木 明德 会員

中村 和彦 会員（2003年度まで在職）

曳野 由季子 会員（第1期卒業生）

総合司会

中村 卓治

### III 第1部 学科専門科目での取組について

「教員の多様な専門性と専門科目」、「専門科目『人間福祉特講Ⅰ』と『人間福祉学入門』の出版」、「学科専門科目の関連とマップの作成」について、菅井会員、李木会員よりお話をいただきました。

木村：

人間福祉学科は、2000年4月に開設されましたけれども、私たち教員は1999年の夏に開設メンバーが集まりました。初対面の先生が多かったかと思います。7号館はまだ工事中でした。その中で初めて会い、4月に開設され、第1期生を迎えたわけです。当然、1年生しかいませんので、当初はオリゼミも自分たちで企画して自分たちで行いました。この人間福祉学科は22年目を迎えることになります。社会福祉士養成

と精神保健福祉士養成の2つのコースで出発した学科ですけれども、2001年4月より保育士養成も始まりました。それから2007年4月より介護福祉士の養成のコースも加わり、4つの福祉系国家資格を養成する学科となりました。

22年間、人間福祉学科では人を支え、社会を支えることのできる人材の育成を目標に取り組んできました。この目標のもとで、どのような教育活動が行われてきたのか、22年間の歩みを振り返ってみたいと考えています。

最初に2つの内容で振り返っていきたいと思っています。1つは、教育内容について、もう1つが、実習についてです。

卒業生の皆様も、この先生方の話が終わった後に、ご意見等をお聞かせ願いたいと思いますのでよろしくお願いします。

それでは最初に、カリキュラムや専門科目が、どのようなお考えのもとに、作成・開設されたかについて、李木先生・菅井先生にお話いただきたいと思います。

李木：

まずはカリキュラム内容をもとに、どのように授業をするのかということだけしか考えていませんでした。その中で、最も頑張ったのは、「人間福祉学入門」という本を作ったことでした(図1)。これを使って、その当時は「人間福祉特講Ⅰ」を教員全員がオムニバス形式で授業をしました。この授業を運営するにあたり、どのような内容を伝えるか非常に考えました。

人間福祉学入門の一番はじめに、初代学科長の岩崎貞徳先生のお言葉で「社会福祉は総合的な学問であり、様々な領域からまさに学際的にその成果・知見を選出し今まで形成・発展を遂げてきた」と書かれています。「激動が予想される21世紀に入り、政治・経済・社会それぞれの大きな変化に伴い、現在その社会福祉は制度・政策・臨床・実践・研究・教育の領域を問わず、課題が山積みになって、その解決に向かって日々様々な努力なされているところ」だと書いてあるが、まさに社会福祉は一つの総合科目的なところを目指しており、我々はそれを踏まえて授業をやっていたのだらうと思います。だからこの人間福祉学入門を見ると、様々な視点から、福祉に繋がるようなことが書かれていると思っています。

また、改めて読んでいて面白いと思ったのは、松浦五朗先生が執筆された0章には、「大学を学ぶ」と書いてあります。具体的には、「福祉を学ぶ前に大学を学ぼう」ということが書いてあります。これは面白いと思い読みました。大学入学者なのだから「大学で学ぶ」が本来かもしれないけど、松浦五朗先生は、ここではあえて「大学を学ぶ」と書いています。さらに、なぜ大学を学ぶのでしょうか、というところで、「それは皆さんが教養科目を通して専門科目に進む必要があるからだ」と書いてあります。まずは、教養科目を学ぶことによって専門科目をより深く広く学ぶことができ、さらにはその専門科目の限界を学ぶこともできる。つまり、専門科目にも限界があるということで、しっかり広く教養を身につけた上で、専門性を身につけてほしいという意味です。この0章がすごく光っていると思い、改めて読ませてもらったところです。もし皆さんもお手元に「人間福祉学入門」の本がまだ残っているのであれば、読んでいただけたらありがたいと思います。今、改めて読むと、社会福祉の分からない部分が少しすっきり整理されるかなと思います。

このように、社会福祉そのものは本当に幅広い領域を生んだ学問であり、それを教えていく、伝えていくのが、初期の我々教員が目指したところなのかなと思っています。そんなことを私は思いました。菅井先生いかがでしょうか。

(図 1)

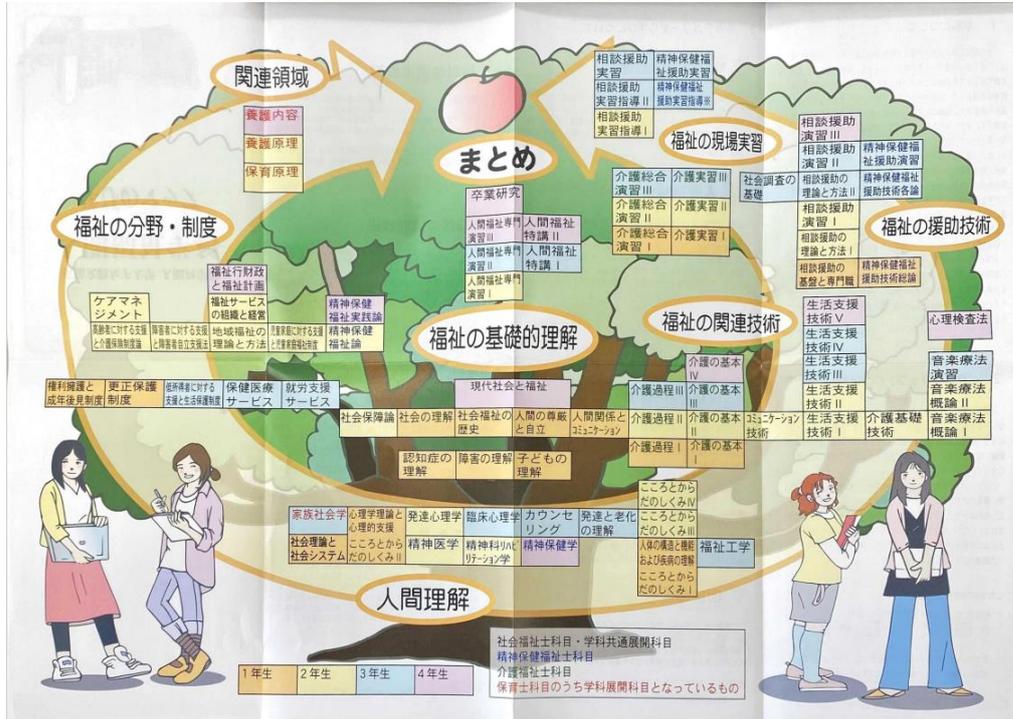


菅井：

はい、そういう視点から見ると今 22 年経って、全国の大学がそうですが、社会福祉士や教員免許など、資格予備校的な動きになってしまい、入学してくる高校生も募集の仕方もそんなふうになってしまいます。本学も、先頭じゃないけれども、かなり早い時期にこうなっていました。国家試験予備校に近づくことで、欠けてきたものとはなんだったのかといえば、李木先生が紹介してくださったような教養のところなのだと思います。とは言いながら、他の専門学校やあるいは他の福祉系の大学とかと比べると、本学は劣らずそこそこやっているのではないかという気はします。そのような意味で、カリキュラム、授業科目名ですが、これがどういう系統で用意されているのかを整理して表にしました (図 2)。皆さんの理解促進のためにこのような作業をしたのは、随分早い時期の 2011 年くらいだったろうと思います。これに先立って、先ほどのテキスト (図 1) が作られ、人間福祉学科の先生たち全員がそれぞれの専門領域を紹介するという授業がありました。一応アウトラインを皆さんの頭に入れて、それぞれの分野の勉強をなさる、あるいは卒業論文のテーマを決めてもらうということをしていました。

この間、私の部屋を整理していたら実習計画室会議という記録のファイルが出てきて、皆さんを実習に送り出すにあたり、かなり丁寧な準備をしていたことが分かりました。実習計画室で助手をされていた、中村さんと内海さんを中心に準備をしました。そして、その後に加わってくださったのが、今日お見えの福田先生です。その辺りで実習の話に繋がっていけると思います。実習や現場に出る時のテクニック、あるいは国家試験をパスするための対策が焦点になってしまいがちですが、それ以前の学びを強調し、目に見える形に整理したものです。

(図 2)



木村：

はい、ありがとうございます。今ここに菅井先生が共有してくださったマップですが（図 2）、私たちが、授業を行う時に、今の自分が教える科目を示し、どこを受けてこの科目があるのか、どこへ繋がっているのか、ということ意識しながら、それぞれの科目の組み立てをしたように思います。それから、学生の皆さんにも、今何のためにこれを学んでいるのかということ意識していただきたいということで、このマップもあの初期の頃は活用していたように思います。

実習というのが出ましたので、ここで（図 2）にあるリンゴの実がみのるところには、実践力という力が身につくわけですが、これに学科としては、実習を非常に重要なものとして位置づけをしていました。そこで、次は実習について、蛭江先生、中村和彦先生、福田先生、1 期生で実習に出た学生として曳野さん、そして、実は実習を受けた側に中村卓治先生がおられましたので、そういったところから、実習に出す時にどう思うか、それから実習でどのように学生が変わってきたのかについて、実習のエピソードなども含めてお話しいただきたいと思います。蛭江先生からお願いできますでしょうか。

#### IV 第 2 部 実習での取組とエピソード

「実習協力施設連絡会の取組」、「初めての実習のエピソード及び成果」「実習で培われた力」について、蛭江先生、中村和彦先生、中村卓治先生、曳野さん（1 期生）よりお話をいただきました。

蛭江：

蛭江です。卒業生の皆さん、お久しぶりです。実習にまつわっての色々な思い出みたいなものをいくつ

かお話させていただきたいと思います。

人間福祉学科が何に力を入れたかということと言うと、とにかく実習を大事にしようという話を最初からしていたと思います。したがって、先ほど菅井先生からも触れていただいておりますが、実習のことについては、かなり皆でよく話し合いをしながら、準備をして取り組んできたのではないかと考えています。実習を充実させるためには、大学だけが一生懸命走ってもどうにもならないわけで、実習を受け入れてくださる施設と大学が二人三脚を組んで、初めて学生の実習の質を高めていくことができるというのは当たり前前のことであります。したがって、実習施設とどのように二人三脚を組むか、ということについては、かなり力を入れてきたように思います。その一つが、形としてはどこでもやっていることですが、実習施設連絡会を立ち上げたわけです。このときに一つ考えたこと、大事にしたことは、大学側から実習を受けくださる施設に、注文なりお願いをするということに留まらないで、大学と実習を受けくださる施設が、共通して目指すものを共有し合っていく、あるいは大学と実習を受けくださる施設が共に育ち合っていくような関係を作ることによって、実習に来た学生の実習成果を上げていくことができるんじゃないかと、ここは非常に力を入れたと私は思います。当時、社養協（日本社会福祉養成校協会）で実習指導教育の委員をしておられた東京福祉大学の村井美紀先生に来てもらい、実習をどのように考えて進めていけばいいかという学習を、施設側と一緒にしたということが象徴的だったと思います。エピソードを言うと、その学習会の後の教員との懇談会のときに村井先生が、「蛭江先生、私、本当に感動しました。」と言われて、それはどういうことかということ、「だいたいね、どこの大学に行っても最後になると、先生方が学生への対応で困っているという話をよくするんだけど、今日は一言もどの先生からも、その話が出なかった。こんなことは私は初めての経験でした。」とお言葉をいただきました。私はこの村井先生から「感動しました」と言われたことが、いまだに忘れられない。これはやっぱり文教の本当に素晴らしいところではないかなというように私は思っています。

それから、実習巡回というのは、実習に行っている学生だけを何かフォローするっていうものではなくて、受けくださっている施設とともに価値観を共有していく一つの大事なチャンスというように私は思っています。大学がどういう思いで、どのようなことを期待して実習に出しているか、そのことの方を受け止めてもらうことによって、実習で目指すべきものを共有し合う機会ということを私は意識して訪問しました。ともに福祉観を共有するということを、念頭に置いて、巡回したことを今でも覚えているわけです。

今、実習でどこへ行ってもそうですが、「文教の実習生は違いますよ」ということを必ず実習先が言ってくださる。それはやはり、いかに学校側の実習に対する思い入れがあるかということと同時に、学生が本当に真面目に実習というものに向き合ってくれているということの証だと思います。その分だけ実習施設が非常に熱心に指導してくださるということになってくるというわけです。

私は忘れられないことの1つに、ある高齢者のデイサービスに実習に行った2人の学生の巡回に行ってきた時の話です。学生の態度が非常によなくて、「何しに来たのか」というような態度で私を迎えました。それから何を開口一番言ったかということ、「私の実習に対してなぜ施設の職員さんにあんなゴタゴタ言われなきゃいけないのか」と、かなり険悪な雰囲気でした。しかし、2回目に巡回に行った時には、ガラッと態度が変わっていて、「先生忙しいのによくおいでくださいました」と玄関で迎えてもらった時には、本当に

びっくりしました。その2人は実は実習中に、溝渕先生がよくそういう言葉を使われますが、“実習中学習”というのをよくやっていました。実習期間中に大学の図書館で勉強をして、また次の日に実習に行くというように繰り返して実習期間を終了しました。だから、彼女たち2人の成長というのは物凄くドラマティックでした。よく実習で私たちは「学生は育つ」と言いますが、本当にそれを絵に書いたような形で、彼女たち2人が実践してくれてくれたということに、本当に私は感動しました。実習施設がどれだけの思いを持って指導してくださったのか、そのことによって学生がどれほど成長するかっていうことを、本当に実感させられたいい経験で、私は未だにその2人の学生のことを忘れられません。ただ一方で、はじめの頃は、李木先生や木村先生と実習施設に謝りに歩いたということも今では懐かしい思い出として残っています。これはまた後ほど李木先生や木村先生からもお話があれば聞かせていただければいいと思います。

今までお話してきたように、実習で施設側が本当に熱心に指導してくださいました。文教の思いを受け止めて、指導してくださっているということは本当に感謝で、私は学生に「先輩たちが行って真面目に良い実習をしたから、あなたたちを良い環境で迎え入れてくれているんだよ。そして、後輩の人たちのために今度はあなたたちが良い実習をすることによって、後輩が良い実習に入れることになるんだ。その積み重ねが歴史を作るっていうことなんだよ。歴史っていうのは年数がたてば歴史が作られるのではなくて、本当にそういう努力をして積み上げていく、自分たちが一生懸命取り組むことによって、後輩たちが育つ環境を作っていくことに繋がっているとその積み重ねを大事にして、実習に行くっていうことが大事だよ。」と私は機会あるごとに、学生の皆さんに言ってきたように思います。ちょっと長くなりましたが、終わりに、私は現場の人たちに、「文教の学生は、持久力がある」ということを言い続けてきています。だから、「しっかり育てていただきたい」とお願いをしています。今日、参加してくださっている方々を中心に、皆が本当にそれを実践してくれていたということ、もう一度ここで確認して、共有財産にしたいと思います。今では卒業生たちが、実習生を受け入れて指導して下さる立場に立って、後輩を受け入れてくださっている。本当に教員たちにとっては教員冥利です。こんなに嬉しいことはない。そうやって後輩を皆で育てていく歴史をこれからも積み重ねていただければ嬉しいなと思います。皆さんが本当にご活躍してくださっていることに感謝したいと思っています。私の話はこのぐらいで、ありがとうございました。

木村：

はい、ありがとうございました。また後で適宜入っていただけたらと思います。それでは、精神保健福祉援助実習のことについて、中村和彦先生と福田先生の方でお願いいたします。

中村和彦：

中村和彦です。ご無沙汰しています。今の木村先生がおっしゃってくださったように、実習のことだと思いますが、冒頭に木村先生がお話された22年間のうち、私は4年間しかいなかったのですが、1999年に集まった時のことをよく覚えています。教員がとにかく一生懸命だったということ、また、私もまだ30代半ばで、これからという時だったので、何が何だかわからない中で、李木先生とよく話をしていたと思います。李木先生の研究室が4階にあって、とにかく何かを話していたという気がします。それが何か学生

さんのためになっていたかもしれないですし、実は私自身のためになっていたことも事実です。あの大変な文教の4年間がなければ、今はなかったと、いつも思っています。

当時は、いわゆる社会福祉やソーシャルワークを専門にしていた先生方も少なかったです。蛭江先生のごことは、現場における記録の本を読んだことがあったのでお名前だけ存じ上げていましたが、あとは初対面の先生方ばかりでした。広島という場所も初めてだったので、よくわからないままでした。先ほどの人間福祉学入門のテキストもそうですが、随分よくできたという気がして、あの表紙は確か障害を抱えておられる方の絵だったので、もう20何年前からそういうことをやっていたわけですね。

少し実習のことに焦点を絞ると、そもそも私は精神保健福祉の担当でしたが、大学の教員が初めてだったので、そもそも教員というのが分からなかったです。それから、例えば札幌とか北海道の精神科病院も20数年前ですから、まだまだ病院中心だったと思います。札幌の病院の事情とかは分かるわけですが、広島の病院は全く分かりませんでした。実習先がどうなっているのかも分かっていませんでした。当時は、大学周辺にある2つの病院といくつかの病院が、実習施設として認めてもらうために、登録されていたと思います。しかし、それがどこにあるか、あるいはどういうワーカーさんがいるかということは全く知らない状態でした。

そのため、まず私としては、広島県のPSWの人たちに受け入れてもらわないと駄目だという思いがすごく強くありました。広島県のPSW協会の方々の中に、色々なきっかけを頂いて入れていただいて、そのとき、当時現場におられた中村卓治先生とも初めてお会いしました。中村卓治先生には、良い実習先と言われている実習先を紹介してもらい、繋がりを作りました。広島ですので、キーパーソンになる方と繋がると、皆「わかった」と言ってくれるような雰囲気がありました。そういう雰囲気は、実は北海道にはありませんでした。北海道は様々なところから来た流れ者の町ですので、強い結びつきがあまりありませんでした。皆一人ひとりが自由にやっているということが多くて、その風土の違いの中で、本当に良くしていただきました。これはもう本当に。

その分、当時現場においても実習をどのようにするのかということが課題だったと思います。現場の方々がマニュアル作りをしていて、そういうものにも入れてもらって、随分車で移動していたような記憶があります。私は軽自動車で行っていましたが、すぐ中古で普通車を買って、あちこち行った記憶があります。そんなことで実習先を整えながら臨んだという記憶があります。後ほどお入りいただく福田先生にも助けをいただきながら、曳野さんも最初だから犠牲者といえば犠牲者ですけども、間違えがなければ3年でも4年でもいけるような実習の組み方ではなかったのでしょうか。何かタスキみたいになっているような。精神が先とか後とかいうことではなかったと思います。これは、全国的にも珍しかったのではないかと思います。

それから、週に1回訪問指導に行った記憶があります。これも先ほど蛭江先生のお話にあったように、新参者で、尚且つ後発校だから、やはりそこはある意味「姿勢」を示す必要があるのではないかとということで、学生のために週1回の訪問指導をするとどこかで決めた気がします。私は今、文教を離れてから2校目ですけども、北海道の北星学園大学でも今は帰校日を含めて毎週行くことになっています。その前の大学もそうですが、何かこう当然行く必要があるけれども、このような取組が出発点だと思います。あの当時は毎週じゃなくても良かったのですが、そういうことも思い出しながら、非常に丁寧にやっ

たということが記憶にあります。

そういう中で学生を中心にしながら、現場の指導者と、そして利用者さんと大学という、三者関係ではなくて、四者関係みたいところで、丁寧にその後も積み上げられてきたのではないかというように思います。やはりそこが重要で、1年2年3年では見えてこない部分ですが、たくさんの卒業生の方が現場で仕事をされていることが結果的に財産になった。大学は学生のためにしているわけですが、それが結果的に利用者さんや患者さんのためになっていくという。そういうことなのではないかと思いながら、その後も色々立場は変わりながら、仕事を続けているところです。思い出話になるといけないので、もうやめたいと思います。

菅井：

ちょっと補足させていただきます。あの頃は、毎週1回巡回に行っていたのですが、それは大変なことでした。ゆくゆくは卒業生がベテランになって、実習生を受け入れてくれるようになったら、後輩指導をしてくれる、ということを期待しながら、スタートをしたのを覚えています。そして20年経ってみたら、今日おいでの皆さんもそうですが、実質的にそれをやってくださっています。さっき蛭江先生のお話にもちょっと触れられたような気がします、そのような状況になってきていると思っているところです。以上です。

木村：

福田先生いかがでしょうか。

福田：

先生方、卒業生の皆様、ご無沙汰しております。学内の先生も滅多にオフラインでお目にかかることはありませんので、ご無沙汰しております。

私は学科設立当初からいた人間ではありませんで、設立当初の学科長を務めておられた岩崎貞徳先生にお声がけをいただいて人間福祉学科設立2年目から、1期生の方が2年生になられたところから、3人目の助手として加わりました。御二人先輩の助手の先生がいらっしゃったので、おとなしくしていたつもりだったんですけども、まずは実質的なことで、先生方、それから学生の皆さん、実習先で学んでいただくことの土台に、事務的な手続き書類がたくさんあり、しっかりやろうっていうようなつもりで、取り組んできました。当時はその岩崎貞徳先生もそうでしたし、精神の実習で言うと青田先生もですが、当時私が書類案を作ると、真っ赤にして返してくださるということがよくありました。そこで随分実習の枠組みを作るというところでは、手引きも含めてしっかり学ばせていただきました、私は福祉学科に5年勤め、その後心理学科に変わって、臨床心理士、それから最近では、公認心理師の国家資格ができましたので、そこで実習先との調整や学生の指導などをやっているのですが、福祉学科での学びが、今に繋がっているように思っております。私も学生と一緒に育てていただき、大学教員としてのスタートを、人間福祉学科で過ごせたということは、とてもいいご縁をいただいたと思っています。

そのご縁ということで、先ほど中村和彦先生や中村卓治先生とご一緒に仕事をさせていただいたわけで

すけども、とにかくお2人とも熱かったというのが印象的です。私も専門は心理学でしたので、あまり違うのではないのと思いつつ、呼ばれるままに着任しました。しかし、やはり福祉の方の視点というのか、対象者についても、それから社会のあり方についても、「本当にそうなのか」というところの本質的なところを探られる姿勢が、私の経験が中ではなかったことだったので、とても印象的でした。それから、学生に対しても、今日色々な先生のお話からも出ましたが、非常に丁寧に真剣に向き合ってくられたという印象がありました。

今日のお話を木村先生からいただいたときに、「実習に行くともっと学生が化けるんだ」ということをおっしゃっていて、そうだと納得するようなことを、昔の記録から私も探ってみました。精神科の病院が初めてという学生がほとんどでしたから、病院に対してもそれから患者さんに対しても、構えがあって、動けないということや、あるいはその怖さを隠そうとして表だけ合わせようとしたり、取り繕ったりするようなことなんかは起きたりしました。そこで巡回に行くと、実は怖いんだというようなことを教えてくれて、そこから変化があって、自分の怖さを怖さとしてしっかり認めつつ、自分にできることは何だろうかという風に考えていくようになるということが、実習ならではの経験だと思います。それは多分、学生1人でできたことではなく、現場の先生方や実習指導、熱い先生方の化学変化があったからだと思います。

最後に、先生方のお話を聞きながら思い出したことは、本当によく集まっていたということをおぼろげに思い出します。カリキュラムを厚労省の都合で変えなければならなくなった時は、当時李木先生のお部屋や蛭江先生のお部屋に行き、学科長の部屋に行くと、学科長がコーヒーを出してくださったりなど、色々なことがありました。取り止めがなくなってしまいますので、私からはそれぐらいにしたいと思います。ありがとうございました。

木村：

ありがとうございました。1期生を実習に出すときに、私たちはすごく力を込めて「この実習はこういうふうに出そう」ということで、たくさんのお話をしましたし、私達も実は緊張しながら、実習生を送り出しました。

送り出された第1期生の初めての実習生として曳野さんは、いかがだったでしょうか。

曳野由季子（1期生）：

はい、ご無沙汰しております。卒業後、島根県の方に戻りまして、ずっと精神科のクリニックで精神保健福祉士として務めさせていただいております。

実習は私にとって、ものすごく強烈に記憶に残っています。その当時は、自分のことではなかったもので、学校の先生方がどのような思いで送り出してくださっていたのかというところは、想像する余地もありませんでした。ただ、丁寧に配慮していただいたことは感じていて、何か実習の中で教えていただいたとか、指導していただくという感覚よりは、私自身が実習の中で感じることや変化していくことに、近くで一緒に振り返りながら見守ってくださるというスタンスで、いてくださったというように受けとめています。

私は自分自身や現場に対しても、ひたすら感じ取る実習でしたので、前期実習も後期実習もひたすら苦

しかった記憶があります。フィードバックの時間では、私が苦しくて言葉にならないものを一生懸命言葉にして伝えた際に、当時指導者だった中村卓治先生が腕を組みながら「いいね」と言われて、当時は「それだけ!？」と思ったりもしました。ただ、今になってみると、自分自身について考える時間をたくさん作っていただいたということが大きかったと感じています。実習の中で感じ取ったその当時、中村卓治先生がおられた入院施設のある病院で、入院患者さんとお話をさせてもらう機会がありました。自分が感じ取ったことや混乱したこと、病棟から10センチ15センチしかない、開かない窓から顔をくっつけてみて、外を眺めるということはどういうことかを体験してみたりなど、様々なことを経験させてもらえました。そこで経験したこと、振り返った苦しさというのは、今仕事をする上でもすごく柱になっているといいですか、あの経験があったからこそ、入院することや、地域で暮らすということがどのような意味を持つのかということ、考えることができているというように思います。

卒業してからも、文教の先生方には、島根福祉学会に協力をいただいています。何度も島根に足を運んでくださり、学会での講演や学会後の飲み会で、実習の裏側や文教に来てくださるに至った裏側などをお話して下さったり、そういった機会を設けてくださったことで、色々な方々の教育の思いや現場に出していくことの思いを聞かせてもらいながら、今の自分のあり方がどうなのかという振り返る機会になっていました。

私は1期生で文教を卒業して社会に出ましたが、現在私が仕事をしている島根では、ある大学で精神保健福祉士の養成の方が始まりまして、色々なご縁があって、1期生の実習生を受け入れるということがありました。そのときに、色々な教育カリキュラムの変更の中で、実践していける力も大切ですが、やはり自分自身の経験した実習や学生のうちにきちんと経験しておくべきこともあるのではないかと思います。面接技術とかではなく、感じ取る実習をメインにさせてもらいたいとお話をさせてもらいながら、今実習を受け入れさせていただいているところです。このやり方が合っているのか、どうなのかというのは分かりませんが、社会に出て感じることと、学生のうちに感じることというのは、やはり違うと思います。

今日お話を聞きながら本当に丁寧に私たちを実習に送り出していただいて、実習報告会のことも本当に鮮明に思い浮かびます。本当に丁寧に取り組んでいただいたからこそ、今私がこうして振り返ったり、思い起こしたりすることができるのだらうなと感じます。今日の先生方のお話を聞きながら、今度はその要請を現場からサポートする立場として、どのようなあり様でいるべきなのかと、ちょっと考えさせられるような時間でした。また少し感染症が落ち着いたら、文教にも足が運べたらと思っていますし、全国に戻っておられる卒業生の皆さんともまた繋がれる機会があったらいいなと思っています。ありがとうございます。

木村：

ありがとうございます。曳野さんが実習に行かれた時に、実習施設側のワーカーの立場として、中村卓治先生、何かお感じになったことやどういう意図で指導したというようなことありましたらお願いします。

中村卓治：

はい、私と中村和彦先生が存在する限り、曳野さんが必ず学生の立場から話してくださる…。腐れ縁ですね。ありがとうございます。

報告を受けるたびに何か身が引き締まる思いで、勉強になります。曳野さんをお受けした後、結果的に繋がって、今教員しておりますが、少し実習をお受けした時のことを含めたお話をさせていただこうと思います。

中村和彦先生もおっしゃいましたが、2000年前後から社会福祉学が少しブームになりまして、広島県内もご承知の通り、もともと県立広島女子大学にしか社会福祉学科がありませんでしたが、私立を中心に、社会福祉士・精神保健福祉士を養成する学校が増えました。その中でも文教はどちらかというと後発組でした。実習は他大は夏休みや春休みが中心の実習期間であるため、そこを工夫し、文教が入り込める余地があるだろうという狙いも含めて6月と11月に設定したり、今もそれが続いています。ある日、中村和彦先生と福田先生が私の前の勤務地である病院にご挨拶にいらっしゃり、そこから関係が始まりました。いい教育をしていきたいというようなビジョンを語っていただきながら、非常に誠実なご対応をいただいていた。当時の私は、自分自身のスーパービジョンの一環として、実習生を受け入れていました。実習生が感じるものを汲み取り、私自身が仕切り直しをしていくという機能を持たせたいというねらいで、無条件で色々な養成校の実習生を年間10数人ぐらい受けていく中で、文教生の実習生を受け入れることになりました。

曳野さんをお迎えした時、お世辞抜きで、何かいい違和感を感じていました。そのいい違和感は、実習指導で曳野さんと関わる中での謙虚さや誠実さであったり、ただ素直なだけじゃなくて、粘り強く、私らがアドバイスしたことを一生懸命体現しようとする姿勢だったりとか。あとは、中村和彦先生が巡回にいらしたときに、非常に関係性が良くて、何を話されているのか、私は分かりませんでしたが、巡回後すぐすっきりした感じで曳野さんがいらっしゃったのが印象的でした。はっきりとは表現できませんが、いい意味の違和感がずっとありました。実習指導者としても、先ほどの木村先生をはじめ、色々な先生の説明にありましたように、現場との良い関係を作っていくというコンセプトがあった学科でしたので、学会にお呼びいただいたり、実習指導者連絡会議へお招きいただいた時も、非常に丁寧に対応していただいたということを感じながら、過ごしていました。

一番印象的だったこととしては、実習が終わった後に現場の側からのスーパービジョンというところで、特別非常勤で文教にお呼びいただいて、実習報告会に立ち合わせていただいた時のことです。そのときに、曳野さんも含め1期生の方々が順番に、人によっては涙ながらに報告をしていました。それは例えば、長期入院、長期処遇を余儀なくされた利用者の方々の現状を目の当たりにし、中でもその境遇に対するやるせなさや保護室の監禁、いわゆる身体拘束といった、壮絶な状況…。あるいは福田先生が先ほどおっしゃっていましたが、自分ができると行ってみると、中々関われないことの歯がゆさだったり、私たち実習生に何ができるんだろうとか、そもそも自分たちが目指すソーシャルワーカーって一体どういう存在なのだというところを問い直したり…。そうした見た目には熱い部分は実習中にはあまり感じませんでしたが、学校に帰って学生同士が意見交換する場が、非常に良い意味で壮絶といえますか。さらに涙ながらに訴える思いをまた汲み取っていく先生方の姿勢や、安心して学生がそれをまた素直に言える環境

を見て、非常に良い教育をされているのだと実感しました。そこで私がずっと感じていた違和感とは”関係性のよさ”だとわかりました。先生方同士の関係性の良さでいうと、福田先生が、時間があると先生方が集まってどうしようかと協議できる環境があったことや、学科長がコーヒー入れてくれたことなどもあります。さらに、1期生に先輩がいないところから、この学科をどういうふうにかこう作っていかうかと先生方と話し合える関係の良さ、現場の実習指導者（ソーシャルワーカー）との関係を大事にしようとする姿勢、そういうことすべての居心地の良さなのだと感じました。そういうことを学生の実習指導を通して感じることができました。

もうひとつ曳野さんの実習指導の中で言うと、1期生の時代では、Uターン就職も視野に入れながら、地元（県外）での実習もできて、曳野さんからは就職は島根に帰るという話を聞きましたので、私が当時広島県協会のPSW協会の会長をしていた関係から、当時の島根県PSW協会の会長さんを紹介し、前期で受けた実習を現場同士で連携を取りながら後期の実習につなぐことができました。曳野さんの許可を前提の上で、「前期の実習内容、実習の成果、後期を受け入れた際にはこの部分をまたお願いします」とバトンタッチして、実習施設同士の縦の連携ができた、非常に自分の中では成功モデルで、過去にも後にも先にもありませんが、そのようなことができた実習指導でした。私の拠り所でもあります。

現在社会福祉士が新カリキュラムになり、実習が複数実習になりましたが、1つの基本として実習先同士の連携というものがテーマにもなりました。それを先駆的に、この文教で、しかも1期生で実現できたということが、非常にいい経験だったと思っています。何よりも曳野さんがいい実習生だった、それに尽きます。そのようなことを思った体験でした。以上です。

菅井：

中村先生ありがとうございました。我々実習と関係のない教員も、月に1回の学科会の中に必ずケースカンファレンスのインデックスを作るような時間は取って、学生情報を共有しています。そういう雰囲気はこれからも続いていくでしょうし、実習だけではなくて、様々なところへ反映していくのだろうなと思ったところです。はい、失礼しました。

木村：

ありがとうございました。1期生が本当に私たちも苦労しましたが、1期生も手探りで実習に行って、それなりの成果で帰ってきたことが、この文教の伝統の始まりだったっていうように思っています。失敗したこともたくさんありましたけれども、それが失敗に終わらないで、その後の学びに繋がっているというのも一つの成果かなと思っています。

ここで、参加者の方にもう少し感想を伺ってみたいと思いますが、参加されている卒業生の皆さんで何か実習の思い出や大学での授業の思い出など、どなたでも結構ですので、マイクのミュートを外してご発言いただけたら幸いです。何でも結構ですのでお願いします。どなたかありますか。

中村：

木村先生、村上さんがいい表情で見えておられます。

木村：

本当ですね。村上さんお願いします。

村上梢（4期生）：

今、お話で岩崎貞徳先生や松浦五朗先生のお名前を伺って、学生時代を思い出しました。先生方が週替わりで1年生に対して授業をしてくださっていたのは、今、思うと本当に貴重な時間をいただいていたなと思います。実習はやっぱりそのときは本当に先ほど曳野先輩もおっしゃっていたように、自分のことで精一杯で、確かに泣きながらずっと過ごしてきた時間もありました。巡回に来られた中村和彦先生に「本当にどうしましょう私」みたいなお話をしたことを今でも覚えています。でもその時間があったからこそ、確かにその後、現場でも過ごせましたし、今の仕事にも活かしていると思います。もう本当に今振り返る中で大学時代、先生がたによくしていただいたなど、ただただ本当にもう20年経って改めてわかるというか、実感ができている今日この頃です。

木村：

ありがとうございました。口火切られましたので、どなたかいらっしゃいますか。宇谷さんいかがでしょうか。

宇谷裕樹子（2期生）：

今、私、卒業してから職場が3ヶ所目で、島根で社会福祉士の実習をしたときに、ちょうどあのトリニティの介護福祉士実習の学生さんと一緒にいたのを思い出しました。身体障害者療護施設の方で実習をさせていただいた際に、体験させていただいていたことは日々のケアに関わるようなことが多かったと覚えています。その中で、「あなたは社会福祉士の実習に来ているんだから、介護の技術を身につけて来ている学生と同じような考えで実習をしてはいけないんだよ」ということを、その当時の課長さんにご指導をいただいたときに、関わらせていただいている利用者さんの生活を、自分がどのように捉えていくのかということを考えるための実習なのではないかというように感じたことを思い出しました。やっていることは確かに介護の技術に関わるようなことだったのですが、今やっていることがこの方の生活にどのように役に立つのか、この方の生活の質をどのように高めていけるのかを、考えさせていただく実習だったのではないかと思います。

木村：

ありがとうございました。もう1人くらい聞いてもいいですか。原田さん、いかがですか。

原田里美（7期生）：

授業は、たくさんの資格の勉強をさせていただいたので、本当に先生によくしていただいたなということ、今もお話を聞いていて思い出しています。最初に社会福祉の実習に行かせてもらった時は、蛭江先生の施

設で実習をさせていただいて、私が上手くフィードバックできなくて、実習がなかなか上手く結びつかなかったということ、蛭江先生が巡回来ていただいたときに相談しました。そこでは「学生なんだから完全にできなくても全然いいんだよ」と言っていただいて、すごく楽になったということ思い出していました。ちゃんとできなきゃいけないということを強く思いながら、実習に力込めて行っていた気がするので、ふと力を抜いていただけた一瞬でした。また、巡回に来ていただいて、心が救われたことが今も思い出として残っています。当時、たくさん実習に行かせてもらったので、そのたびに記録をいっぱい書いていました。今、一般の病院で急性期のソーシャルワーカーとして働いていますが、日々の記録を書くのが早く書けるのは、あの時、毎日頑張ったおかげかなと思っていて、誰よりも早く長文の記録を書いて、すぐ帰るというのが、力になっていると実感しています。

木村：

ありがとうございます。他にもたくさんお話を伺いたいのですが、時間が来てしまいました。色々なお話を聞いて、何か根本に流れるものは、同じだということを感じました。最近実習指導者となってくださる卒業生の方々がおられて、保育実習も含めてですが、勤務してから3年目ぐらいでも実習指導者になってくれている卒業生がいます。そのコメントを読む時に、ちょっとドキドキしながら何を書いているのだろうとコメントを読むのですが、3年目であっても、学生に寄り添ってくださる姿勢とか、それから学生が悩んでいることに対しての、その回答の仕方に、変わらない援助観が流れていることを実感しています。以前の卒業生も最近の卒業生も同じような援助観でもって働いているでしょうし、それから実習生も受け入れてくださっているのだろうと思っています。また、私たちがやっていることは方向性として間違っていないのではないかと、少し自信を持っているところです。

では、この会のまとめとして菅井先生、最後のコメントをお願いします。

菅井：

企画の段階では、今も木村先生がおっしゃった「変わらない援助観」というのが1つのキーワードだったわけですが、皆さんのお話に出てきた単語で一番出てきたものを拾っていくと、「関係性」というキーワードも見えてきました。これは当然そうだろうなと思います。だけれども我々らしい関係性というのが、援助観と相まって流れているのだろうと思います。現在、その関係性が壊れているとまでは言いませんが、私たちが苦しんできていることは、質的に違ってきている、あるいは欠落しているということをよく感じます。それをどう紡いでいけるかは、我々の得意とするところだとは思っています。

それからもう1つ「丁寧」もたくさん出てきた言葉です。利用者サイドで、どう寄り添っていくかという、そこでは随分逞しさがいるのだと思います。その逞しさを保っていくのが、これからの皆さんや我々の課題じゃないのかなと、老い先短い菅井は思うところです。「関係性」、「丁寧に」というところでの援助観が、じゃあその文教の援助観って何かなという本を書いてみたら、面白いと思います。そんな感想めいた話をして、まとめにして、よろしいでしょうか。

ここで、皆さんにご提案なのですが、時間は迫っていますが、せっかくお越しの皆さん、ご発言いただいておりますので、特に卒業生の皆さん、お時間ないので一言ですけれど、言っていただけるといいな

と思うのですが、いかがでしょう。私の手元に受付名簿みたいなのがありまして、それ優先で行こうかと思えます。

曳野由季子（1期生）：

本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

宇谷裕樹子（2期生）：

今考えるとやっぱり皆さんおっしゃっていたように、すごく自分が何をその時考えていたか、どういふふうにしたのかということ、実習を通して聞いてくださっていたということを感じて過ごせていたなというように思っています。

大竹 智恵（2期生）：

今日は懐かしいなと思って、色々なお話を聞かせていただきました。先生方ありがとうございます。私も今1月から転職をして、安佐南区の方にあるトライ工房という地域活動支援センターⅢ型の施設で、精神疾患をお持ちの方を主な対象としている施設になるのですが、そこで働かせていただきます。今度文教からも実習生が来てくれるということなので、それもまた楽しみにしています。先生方から受け継いだものを実習生さんにも、渡していけたらいいと思っていますので、よろしくお願いします。ありがとうございます。

槇尾 明子（2期生）：

中村和彦先生と同じく今札幌になぜかいる2期生の槇尾明子です。そうですね。私も今、精神科のクリニックでソーシャルワーカーとして働いています。今日の先生方のお話を伺って、私が2期生でしたから、まだ大学の色々なカリキュラムを整えてくださっている最中だったのだということ、今振り返って思っています。それが、どれだけ大変なことだったかということ、今お話を伺って改めて感じられて、感謝の思いが湧いてきました。そして今もこうして繋がっていられることがとても嬉しいです。ありがとうございます。

菅井：

そういえば、槇尾さんが就職した直後に、事務長さんにお礼の挨拶に行って、あなたの後ろ姿だけを見てこっそり帰ったことを思い出しました。

槇尾明子（2期生）：

本当にありがたいです。ありがとうございます。

山田知子（4期生）：

主人の転勤で毎年他県に転勤するので、今は働いてないんですけども、やはり大学で学んだことに関し

て、粘り強く、とりあえずとことん付き合うという形で、児童領域でずっとやっていました。やはり人の心に寄り添うということを学ばせていただいたので、これに関しては、どんな職業、児童ではなくて、本当に色々な職業で実践できているかとは思いますが。

安部友江（3期生）：

私の方は、この20年間で、大学を卒業してからちょっとした事件に巻き込まれて、支援される側も経験してきたのですが、最近は元気になってきています。ずっと保育士をやっていたのですが、支援者側になってみたいという気持ちが強く、児童発達支援センターと放課後等デイサービスの方に通勤しております。個別療育担当なので、自分が担当している子どもはASDの子どもが多く、日々頑張っているところです。支援される側を経験した本人として、どうしたらこれから生きていけるのか、世の中に出るにはどうしたらよいかというところに目を向けながら、子どもたちに寄り添っているところです。

竹中まなみ（4期生）：

今私は子育ても落ち着いたので、グループホームで働かせてもらっています。そこで今若い子と一緒に働かせてもらっているのですが、育てるというより、話を聞いているところです。今回福祉のことで、話を聞いていたら、若い子たちの話も聞きつつ、これから先生たちが教えてくれたようなことを、今若い子たちと共有しながらやっていかないといけないということを感じさせてもらえました。

越智美幸（4期生）：

今社協に入職して10年以上迎えました。大学のときに地域福祉がすごく苦手で、菅井先生にもすごく迷惑をおかけしたと思うのですが、木村先生にご縁をいただいて、今の仕事に楽しさを感じています。今日のお話を聞かせていただく中で、福祉とは暮らしの全てなので、どこか一場面を切り取って支援することは、絶対にできないということを、特に社協の仕事をしていて思うところです。やはり文教の”心を育てて人を育てる”というところの大切さが今現場に出てすごく実感しています。今年実習生として文教主を初めて迎えさせていただいて、一緒に実習をする中で、社協の仕事とは何なのかということだけではなくて、そういうところも一緒に伝えていければと思っています。これからもよろしくお願いします。

菅井：

地域の実感というのは、中高年以降にじみ出てくるものですね。中高年の世界だから。私なんかはまだです。

大熊裕子（4期生）：

私は今子育てに集中しているので、福祉から遠ざかっていますが、今日すごく久々にお話を聞かせていただき、とてもアットホームな学校を卒業させてもらったのだというのが、分かりました。お世話になりました。

中村 潤子 (5 期生) :

私も少しの間でしたが、人間福祉学科で助手として働かせていただき、その時もすごく感じていたのが、先生方が学生のことを本当によく考えておられる姿を見ていて、自分のこともそうやってみてくださったのだと、一緒に働かせていただいて感じたことを思い出しました。今は福祉の現場ではないですが、元気に働いております。皆さんの顔を見ることができて嬉しかったです、ありがとうございます。

村上梢 (4 期生) :

今、廿日市で蛭江先生のお言葉の重さを日々実感しているところですので、先生方のありがたい言葉をこれから伝えていければと思います。以上です。

真多えり (5 期生) :

今日はあの当時の裏側の話をお聞きして、実習中は自分自身のことしか見えていなかったと、先生の土台の上に実習に行かせてもらっていたことを感謝申し上げます。今年度、文教の実習生を初めて地域包括支援センターの方で受けさせていただきました。また今後も自分自身の学びとなるように、お勉強をさせていただきたいと思います。今日はありがとうございました。

太田美穂 (5 期生) :

私の方も地域包括支援センターの方で働いていまして、実習の受け入れはしていませんが、施設の方からは、時々文教の学生さんだよと言って連れて来られて、後輩なのだと思ったら、何でしょう…まんまと先生方が思っていた通りの感じで、少し言えることがあるかなと思いつつながら、お話させてもらうこともあります。本当に実習を受けさせてもらったときには、先生方がされていたことをそのまま単純に享受したのだと思った次第です。また大事なことを色々伝えていけたらと思うところです。

石内舞 (6 期生) :

私は今育休中で、4月から職場復帰しますが、福祉とは関係なく、販売員をやっているので、福祉の座学で学んだことを、そこまで発揮することはないのですが、人を思いやる気持ちや人と関わる大切さを今すごく実感しながら、もうすぐ復帰しようかと思っています。

原田里美 (7 期生) :

実は今二人目の育休中で、同じく4月から職場復帰予定なのですが、どうやってモチベーションをまた上げようかと悩んでいたところでした。先生方の懐かしいお話聞かせていただき、また頑張れそうだなと思ったので、4月から頑張っていきたいと思います。今日はありがとうございました。

菅井 :

そういえば、皆さんお子さんを産んで育ててっていうお言葉が続々ありますが、昔と違って私にも孫がなんと4人もいるという、私の立場も変わってきてますね。

森澤美穂（13 期生）

大学を卒業してからまだ病院で MSW として働いています。今日色々なお話を聞かせていただいて、やはり文教は繋がりがすごく、先生方もそうですが、卒業生の皆さんや在校生の皆さんと繋がりを持っていることがすごく私にとっては心強いです。働き始めた時は、結構しんどくて、3 年続くかなと思っていましたが、中村先生が誘ってくださった事例研究会みたいなものに参加させてもらって、そこで日々のつらさとかを先輩方と共有させていただきました。そういう機会がここずっと卒業してからも持っていることが、今私がまだ仕事を続けられている一つの強みなのではないかと感じています。またぜひこういう機会を今後も、今ちょっとコロナでなかなか対面っていうのは難しいですが、今後も続けていただければ、ぜひ参加させていただきたいので、よろしくお願いします。

菅井：

何か重みあることを言ってくれましたね、森澤さんだけではなく全員ですが。

川崎祥子（4 期生）：

私は皆さんが思うような振り返りができていないという感じなのですが、むしろ大学生の時には大学依存していました。もう私のことは私より先生や他の学生の方が知っているぐらい、あまりふり返りをせずに 4 年間過ごすような感じになっております。改めて今日参加させてもらえて、すごく懐かしいなど、単純に良かったなど、故郷に帰ったなみたいな感じで覚えております。あと 1 点、大学は、こうやって集まれば 4 期生ですと言えるので、どこか若くなった気分させてもらえて、全然実習の話とは関係なくて申し訳ないですが…。実習の思い出としては、ずっと泣いていた記憶があります。今後とも抛り所にさせてください。また、私は 4 月から転職して県社協に変わりますので、前向きに頑張っていこうと思います。よろしくお願いします。

矢野真澄（1 期生）：

1 期生として大変お世話になりました。もう 22 年経ったのだと思って。木村先生、菅井先生、蛭江先生、李木先生、中村卓治先生、島根県学会で色々とお世話になりました。今日本当に話して、懐かしいと感じるお話が聞けて、とても嬉しかったです。実習のことを振り返ると本当に先生方に迷惑をかけた思い出はありません。大学生活があったから、今も働いている糧になっていると思っています。今日はこのような貴重な機会に参加出来てよかったです。ありがとうございました。元気にやっています。

砂田（在校生）：

在校生なのですが、今日お話を聞いて、今自分たちが実習をさせていただいているのは、先生方や先輩方のこれまでの積み重ねがあつてこそだということを知れたので、これまで以上に感謝の気持ちを持って、これからの実施に取り組んでいきたいです。

重岡亜依（4期生）：

私の大学での思い出といますか、すごく記憶に残っていることは、「福祉を勉強したからといって、福祉の専門的なところで働かなくていいんだよ」と、菅井先生が言っていたのに、私に「福祉をやってくれ」と言ってくださったことが、記憶に残っています。今、私は高校で福祉を教えていて（介護福祉士を取得する勉強ではなくて）、少し福祉に触れたいというような高校生に対しての福祉コースで教えています。菅井先生から教えてもらったその言葉を私も高校生に伝えていっているところです。当時、その言葉聞いたときには「え？」ってすごく思いましたが、今はそれがよくわかるというか、それを伝えている立場になっているのだと感慨深い思いです。今日先生方のお話聞いて、こんなにもすごく大切に育てていただいたのだということを感じ、私も今高校生に伝え、育てていく立場なので、先生方ができてくださってことをしていきたいと思いました。来年度、うちの高校から2人違う学科ではありますが、文教に行くのでよろしくをお願いします。

菅井：

はい、ありがとうございました。最初の木村先生のお話のところで抜けていましたね。当時はこの学科で高校福祉科教員の養成をやっていた時期があり、私がおその担当でした。3人か4人、教職に就いている人がいらっしやるはずです。

山藤（在校生）：

私はこの会がどんな会なのかなって軽い気持ちで入ってしまいましたが、卒業生の皆さんや先生方が楽しそうに話されていて、興味深く聞いていました。また、私は3年生の社会福祉実習でお世話になった地域包括支援センターの真多さんと、オンラインですが対面でお顔を拝見することができて嬉しかったです。

菅井：

はい、ありがとう。卒業生の皆さん、こんな風な在校生が続いていますよ。心強いことだと思います。在校生の皆さん、今回は20周年ということで、実習をテーマにやりましたが、いつもはそれぞれの卒業生の実践発表をつついていくという、中身が濃いスタイルでやっていますので、卒業と同時に入会していただいて、あなたも支えていってください。ありがとうございました。

時間が過ぎてしまいましたが、こういうことで、この時間は閉じさせてもらってよろしいでしょうか。皆さん、ご協力ありがとうございました。

李木：

ちょっとだけいいですか。松浦五朗先生から寒中見舞いをいただきまして。松浦五朗先生は富山でお元気にされています。もう81歳になったよと書かれています。林明博先生から年賀状をいただいて、先生らしいなと思いますが、少し読ませてください。子どもたちは黙食をはじめ自製ばかり余儀なくされていますが、朗報もありました。リアル二刀流の大谷選手の投打にわたる活躍や、藤井聡太の4冠達成です。しかし、親ガチャを嘆き、IOCの商業主義ボッタクリ男爵はいけません。その次からなのですが、人と人とを

分離しない、人権を尊重し、人を許し、繋ぎ、今こそ社会を作り変えていく人流とエネルギーが世界に求められます。まさに人流は、こういう会なのかなと思いながら、読ませていただきました、林明博先生も元気です。

菅井：

林明博先生も李木先生と並んで4階の主でしたね。

李木：

林明博先生と私と吉田あけみ先生がいらっしやいました。

菅井：

懐かしい話が尽きませんが、以上にさせていただきます。お疲れ様でした。

中村：

コーディネートしていただいた、菅井先生、木村先生、ありがとうございました。

今回の学会は、いかがだったでしょうか。私もある意味当事者の立場で、今まで立ち上げの先生方から、今日お話しいただいたようなお考えや具体的なお話を初めて聞かせてもらいましたので、非常にためになりました。ご参加くださいました皆様、本当にありがとうございました。

## V おわりに

今年度はコロナウイルス感染症予防のため、初めてオンラインでの学会開催としました。オンラインを使って多くの皆様にご参加いただく初めての取組でしたので、動作の不具合等でご迷惑をおかけした部分もあるかと思いますが、総勢52名の参加となりました。遠方からは中村和彦先生をはじめ、各地域から卒業生の皆様にご参加いただき、心から感謝申し上げます。

今回、学会のキーワードでもありました「援助観」について、改めて振り返る機会になったのではないのでしょうか。卒業年度が違って、共通した学びを礎に卒業生と在学生のタテの繋がりや新たな視点のきっかけになるような企画を続けていきたいと考えています。来年度も実りある学会になるよう、より多くの在学生、卒業生の参加を期待しています。